

こころの玉手箱

サッカー
元日本代表選手 4
ラモス 瑠偉



落合博満さんと秋山幸二さんのバット

ブラジルにいたころ、この世に野球という競技があることをまったく知らなかった。1984年に結婚した妻、初音のお父さんが大の野球ファンで、一緒にテレビでナイターを見るうちにルールや選手の名前を覚えるようになった。

入った時の自信満々の雰囲気が大好きだった。中日から巨人に移籍してきて3年目の96年、宮崎キャンプを見学した。室内練習場で打撃練習をする落合さんは私を見つけると、バットを持たせて指導を始めた。まともな芯に当たらず冷や汗をかいたが、そのバットにすらすらと日付とサインを入れて、思い出の品にしてくれた。

魂をかけて打ち込む一流選手の話に心を動かされた

落合さんとはテレビ番組で対談したこともある。「10年間ずっとトップを張れる選手が一流。バットと睨んでバットと散る選手はただのスター」とか、同じような考えを持っていることがうれしかった。サッカーの代表戦も見ていて、その指摘がいちいちもっともなので驚いたこともある。

日本代表になった

一流選手と交流、ヒント多く

てから、いろいろな競技の選手と交流する機会が増えた。そして他競技であっても、魂をかけて打ち込んだ一流選手の話は、自分を磨くヒントがたくさんあることに気づかされた。

特にすごいと感じるのはプロの歴史が長い野球と大相撲。昨年亡くなったプロ野球の星野仙一さんとか、会おうとオーラがすごかった。この人の下で働きたかったと思うほど。オリンピックの時だけ騒がれるような競技はまだまだで、この国で「文化」といえるくらい成熟しているのは野球と大相撲という気がする。

どついたらサッカーを、そういうなくてはならないものに日本でできるのか。プロ意識を持った選手がお客さんやスポンサーの支持を集められる熱い試合をする。いい刺激を与えられる外国人選手も必要。そしてプライドを持てる強い代表とクラブがあること。この三つをそろえて歴史を積み重ねるしかないのだろう。